



冷たい炎の画家 ヴァロットン展

三菱一号館美術館 2014.6.14～9.23 (8/2 記)

Félix Edouard Vallotton フェリックス・E・ヴァロットン(1865.12.28～1925.12.29)は、スイス、ローザンヌ出身の画家。16歳の時にフランスに移住。ナビ派(ゴッコンの大胆な画面上の色彩の秩序を啓示的に受け止める)の仲間たちと交流しました。画家仲間には「外国人のナビ」と呼ばれ、家庭では貧しい自分と、裕福な妻と二人の連れ子との間に距離を感じていたようです。したがって常に「異邦人」「女性優位」という意識が心底にあり、その距離感が人物の客観的描写に結びついているようです。

画風は、油彩ではナビ派的なもの、浮世絵(歌麿、豊国)の影響を受けたもの、写真を組み合わせた独自のものがあります。版画では空間を生かした白と黒の絶妙なバランスの中に、ユーモアを含めた社会風刺、戦争風刺を描きました。そして音楽を題材にした挿絵では、描く楽器ごとに背景を変えるなど、楽器のイメージに合わせた細かい配慮があります。

また本来の神話登場人物を逆のイメージで描いたり、公共の場の人間の自然をやさしく捉えたりと、まるで光と影が交差する様な視点も独特です。

何よりも「正確なデッサンと抑えた色調、平面的描写でありながら、立体的奥行きを感じさせる画面、モデルの内面にまで食い入らない客観的描写」の奥に潜むヴァロットンの文学性は、物語を読むような深い味わいと不思議な魅力を与えてくれます。